



長谷川潔から岩田榮吉へ

静寂の形象 見どころ紹介

当館は現在、新型コロナウイルス感染拡大防止のため臨時休館中
です。

2020年4月18日(土)開始の予定だった「長谷川潔から岩田榮吉へ／静寂の形象」も、準備を完了したものの、開始のめどは立っておりません。そこで、開始を心待ちにいただいている皆様に、あらかじめこの展示の見どころをご案内したいと思います。



Prologue：展示会場へ入る前に

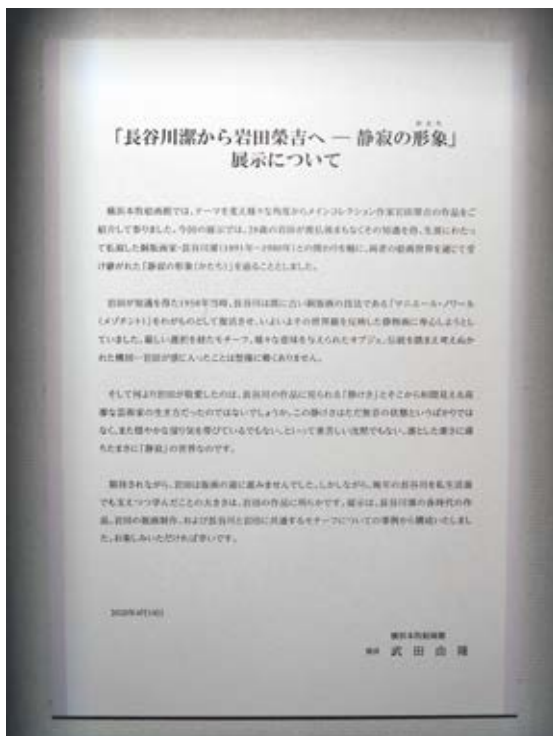
エントランス脇に、本展のバナー広告を掲げました。

もうここから展示の始まりです。上部の人形とその右上に見える鳥の形をしたオブジェは、本展の「メインビジュアル」である岩田榮吉の作品《人形と鳥》の一部なのです。後ほどゆっくりご覧いただくとして、この鳥と人形が、長谷川潔と岩田榮吉を表しています。



それでは展示会場に入っていきます。
入口の扉を開けると、すぐに本展のタイトルが見えます。

ところで皆さんは展覧会場に入ったらずどちらに進むでしょうか？もちろん会場の都合などで様ではありませんが、一般に洋画系は時計回り、日本画系は反時計回りが多いようです。文書が横書きなら左から、縦書きなら右からであるのと同じですね。本展も時計回りに見ていただくことを前提にしていますので、まずは左から見始めます。



入口すぐ左の最初のパネルは、この展示についての概要です。タイトルの「長谷川潔から岩田榮吉へ」と「静寂の形象(かたち)」の意味するところ、全体の構成などを解説しています。単なるご挨拶に留まるものではありませんので、ぜひご一読ください。

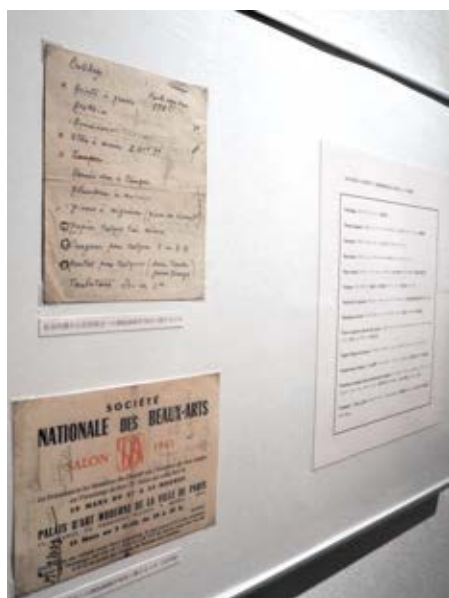
第1部：長谷川潔の版画

第1部は「長谷川潔の版画」。長谷川潔といえば、漆黒の表現が独特の銅版画技法「マニエール・ノワール」による、物語性に富む静物画が有名ですが、そこに到達するまでをそれぞれ特徴的な作品で辿ります。なお、今回の展示には、銅版画の制作にともなう様々な用語が出てきますが、会場で配布する展示目録の裏面に用語解説を記載しましたので、そちらを参照しながらご観覧いただくことができます。



第2部：長谷川の期待

続く第2部は「長谷川の期待」。1958年、自らの継承者を求める67歳の長谷川と、今後の画業展開を模索する29歳の岩田は、パリで出会います。長谷川が岩田に渡した銅版画制作用具のメモ、岩田の銅版画試作作品と原版、そして避暑先での歓談情景写真などに二人の交流の一端を垣間見ることができます。



第3部：モチーフと作例

第3部は「モチーフと作例」。静物画の形をして実は思想をあらわしている…という長谷川と、その長谷川に学んだ岩田には共通するモチーフがあります。その中からまず「鳥」を取上げます。



ここで本展の「メインビジュアル」、長谷川の《小鳥と二つの枯葉》、岩田の《人形と鳥》が登場します。

ほかにも「人形」、「彫像」、「レース」、「球体・ガラス球」のモチーフを取上げ、それぞれの作品をモチーフごとに並べてご鑑賞いただけます。

第4部：晩年の長谷川潔と岩田

最終の第4部は「晩年の長谷川潔と岩田」。結局銅版画の道には進まなかったものの、岩田は終生長谷川を敬愛し、私生活面での支えともなりました。岩田は、フランスでの長谷川追悼展実現にも大きな役割を果たし、自らの画業も円熟期にさしかかった矢先、病を得て53歳の若さで長谷川の後を追いました。



晩年の長谷川と岩田の写真、長谷川の葬儀に際しての弔辞表紙、追悼展実現への事務文書などのほか、岩田の代表作（トロンプリュウ・複製）などをご覧ください。



以上をご覧ください際の参考として、世界の出来事と長谷川・岩田の歩みを年表にまとめました。その時代背景と対比しつつ、あらためて両者の足跡と作品をご理解いただくうえで、よい手がかりになるものと思います。

そして本展の最後に、岩田の姪にあたる当館理事長の「展示に寄せて」をご覧ください。長谷川のフランス側ご遺族とのエピソードなどをご紹介します。



世界が平穏を取り戻し、皆様が本展にお運びくださいまして以上の見どころの作品を実際にゆっくりとご覧いただける日が遠からず来ますよう、心より願っております。